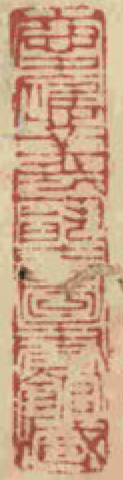
御初稿本



夫和哥者起自八雲出雲之古風廣于文武称武
之聖朝言泉流遠詞林道鮮其降已来貴賤之
不倍携之雅而不学素盞烏之恣詠三十一
字之句云窺玉瀾争知驪龍之珠不覗上郡誰詠
英雄之詠所以依無記文付家之髄脳新抄一篇之
先達口傳故人教誡雖可足依然類不廣遺漏之誡
亟第一正義并二作法并三枝葉第四言語并五
名所第六用意雖非六義之披錦以為一身之鑒
鏡名為六巻名曰八雲抄倚席側須廢忘矣

八雲抄第一

正義部

六義	序代	短哥（或号長哥）	反哥
旋頭	混本	廻文	無心所着
誹諧	折句	折句沓冠	沓冠
物名	賦物	異体	連哥
八病	四病	七病	哥合
謌會	学書		

朝田家藏書

六義

一風ハ以ハそへ言也物をよりよそへよめる也それ字を
いそうたをさしてそといへり
なにはつにさくやこの花冬こもり今は春へとさくやこの花
是ハ仁徳天皇東宮の位をゆつりえすして難波宮に
おはしましけるを王仁かそへよめる也早て有践祚といへり
いへり

二賦ハかそへ言也物をもかそへてしていへり
さく花におもひつくみのあちきなさ身にいたつきの入もしらすて

古今此歌いかにいへるにかあらむ其心得かたしと
書けり

三比ハなすらへ哥也物になすらへてなすらへたるへし
なすらへて云を同事也

君にけさ朝の霜のおきていなハ恋しきことにきえやわたらん

古今にハ歌よくかなへりとも見えすとて其詞の
心をあらはすハ物になすらへて

四興ハたとへうた也

我恋ハよむともつきしありそ海の浜のまさこハよみつくすとも

古今にハそへうたにおなしきやうなれハすこしさまをかへたるといへり

萬の草木鳥獣につけて心を見する也

心ハかくれたる所なしと古今にいへり

五雅ハたゝことうたといへり

いつはりのなき世なりせハいかはかり人のことの葉うれしからまし

古今にハ歌ハ事のとゝのほりたゝしきをいふなり

山桜あくまて色を見つるかな花ちるへくも風吹ぬ世に

歌をかなへたりといへり

六頌ハいはひうたなり

六義のこゝろへをことなりさきに見えて其義分明なり
是ハ世をおさめ家をとゝのふる也此哥ハひとへにことハりを
をとらふいへり
かたち野おほやけにて家ハ我をいふ心ハ神やまとうた
六義やそこつかふへく人といへり
今案背之まつそむきてこゝまて六義へ宇ハえあらす
哥字といふ海ても六義まさ海字かき人字ハ雑分
以組を体をすまらう字ふう人丈字あり字六
いふ所の古今ハ注をかりてとるかれにそ

此たひ男ハ文帝とおもふなるむへをことくらめたる
いふハことわりてこそあらはれ仍弟其也んとてこそ云
又二首ハいくくれかゝりめありことくをたりとも見ゆる
かゝへ家かゝへ所ミと段ハ注をすへしかゝりめ
又りせ大略同事の哥ありてとせるへ云ハ六義なれハ
かりたり是らハさ備てへへるみハ当ろにへ文ある
両るに近比を云乃十躰をそ志れくとゑもろ
よあり并それさいふ古躰哥ある事を躰也
をとこれかゝりめてうり也六乃もとこと侍いて十躰なる

おほくかゝりたる物ゝ様とハ法意をも分ち同字あり
ちかひなきやうを見えハさされとも一ハ四句への字まされ
て子細事あるにたとへハ普通三十一字長歌
并たり

序代

むかしハて続序合なとゝいふハおほくハ假名序代なとく
真名ハおほくみ侍也たゞやうもおほくあとみてのちの事
かくせそれハさすゝ小文部様をもかきたる也貫之大井
序代なとゝて見えて むかしよりいくゝ秀逸なん

一ともみえて集序も同字也古今序ハ前代後に
拾遺ハ之をひとよそなと後拾遺金葉なとに序を
されたる也新古今先序も首尾かけあしく詞は
意非ねよあるかゝ侍るなり也たゞ序代ハ殊人
てみえていさゝく詞をよハおほくへるゝ用捨也行めるゝ
詞三きらよゆゝけなるを見分しらくハえて
かく八字也清輔で匡房ハ后序をた詞あり
さるをくゝを其海てかゝる序ハひらよ後のくく
ふへ其詞ら

旋頭哥　或称五句哥也　長哥

みそもじ句ハ頭の言葉をかへして七のしもにかへる事
五文字をそへて旋らしたるハ七文字よりをいふ也
ハは句をならべもちゆるゆえに文字をかへしたる
首尾おなじ也　中は七五句かさなる有也　七旋ハ今ハ
ハは句を組て旋は五つを長く所も見さめす
連ねはなくハこれをかへして五七五七七五　不定也
癖がもあるを半ハ旋してかへす半にもあるハ
又万葉旋頭哥ハうたいてあれば半をいふ也

ならひとかなし近代ハまれ事ハなくなりぬときこ
えたれとハおさ川のまつりきはをしたる河より
この川のといつの神也　ねもとそおほ尊也

旋頭哥

舒明天皇登香久山望国之時御製

やまとにハむらやまあれととりよろふあめのかく山のほり
たちくにみをすれハくにはらハけふりたちたつ
うなはらハかまめたちたつうまし国そあきつしま
やまとの国は

検税使大伴卿登筑波山時作

草まくらたひのうれへをなくさもることもあり
やとつくは祢にのほりて見れは尾花ちるしつくの
田ゐにかりかねもさむくきなきぬにひはりの
とはのあふみも秋風にしらなみたちぬつくは
ねのよけくを見れはなかき日におもひつみこし
うれへはやみぬ

已上三首万葉の中には詞つゝきもよろしけれと
見所ある哥すくなし古今よりは後にいたりて

おほかれとも長歌をよめる跡多く伊勢及躬
恒各長哥のある也

ちはやふる神な月とやけさよりはくもりもあへす
うちしくれもみちとゝもにふるさとのよしのゝ山の
山あらしもさむく日ことになりゆけはたまのをとけて
こきちらしあられみたれてしもこほりいやかたまれる
にはのおもにむらむらみゆる冬くさのうへにふりしく
しら雪のつもりつもりてあらたまのとしをあまたも
すくしつるかな

又万葉乃中ニ四句を二ツつゝけたる哥もあり但非普通
事ニて謂鶯乃かひこのなかにほとゝきすひとりうまれてよめ
るうたなり也彼ハ短哥ナルを旋頭哥とハ名付彼ハ
古来風躰抄云雖為短哥かのいはゆる長哥ハ人常悦
御時短哥とはかり古人みな詠ける長哥ヲハ彼ハ短哥云長
哥とて同事をいひつゞけて長哥をば短哥とて
いかなるをハ短哥ふとき嶋也又短哥ハ又道也登
為説あり
此哥ハ短哥ヲ以テ祠祀等数事甚ハ難相通

為哥也云哥也右ニて為事此外俳諧長哥又称勝
物也是ハ根相通為為哥ハ只是も彼ハ述懐長哥
是ハ只ハ不及ハ上古之本ハ詠可指南
依不道為哥不入候
称様長哥ハ書抜哉哥新撰髄脳ニハ以之様
短哥ハ普通之哥三十一字哉又謂長哥万葉
又以三十一字謂短哥ト云
反哥ハ
三十一字也

旋頭哥

三十一字よりは今一句をそへてよむ也普通の哥は五句
是は六句也初又七五七々て句々の字数その
句々七字句或又字餘句をそへてよむもあり又五
七々上句五七々下句下へ七々よみそへて七々をいはへてよむ
うたよかりてよみし

うちわたすをちかた人に物申すわれそのそこに
白くさけるは何の花そも 是そは七字ことたらぬと續紀に
此をよみさかてそのこゝろをよめり

はるも家のきはにさくみるふせん 是は初に又字をそへたり
朝月のひむかひの山に月たてり見ゆ遠つまを
もちたる人はみつゝしのはん 是は又字餘句をそへたり
海をかへりみるこゝろよりむかしいぬくみるかは
これもてみねあはれあふさくすれ 是は七字の句をそへたり
旋頭哥は上ゐれは又かへしてよむ故旋頭
哥の名は心やさしくうたはれる句也されは
その昔は上ひとつの句をよみてかへすもの也
すへて上下への句をかへしてよく是を

やんことなりの世又五七〻又七〻五ゟまおり
古今に
きゝかさとてみやまの山かくれかくれたるかな
秋の月志らぬ君の□の世なりと歌
歌これは歌人によんさくといへると又七〻五
七〻也
△混本哥
三十一字内一句不對也又有又句字不足也
一体そいふなれとも普通の事にはあまり用ゐさる

事をしるす
あきかせの夕くれまちにちりやすき萩の
はなそうし　是ハ七字を句にしたるなり
是の人は秋さすれの見ゆとの事こそおもふ
一くうある物を　小町哥　是ハ中の文字十あまりて末の七字は句也七字不足之哥也
其の体の□也吾要とかう人は好の物に
及ふは古今序に一の心をいへる体也
△廻文哥　是ハさかさまによみてもおなしく用ゆる也
むら草に草の名はもしそなはらは

[illegible]
[illegible]
[illegible]
よくよく心得べし

無心所着

万葉十六巻に載する事也そのうたの心ハ
そのさまなくてそのよしなきうたなり

わぎもこがひたひにおふるすごろくの
ことひのうしのくらのうへのかさ

（額　双六　事負牛　鞍　瘡）

わがせこがたふさぎにするつぶれいしの
よしのの山にひをぞさがれる

（犢鼻　円石　氷魚）

右歌者舎人親王令侍座曰或有作無所由之歌
人者賜以銭帛于時大舎人安倍朝臣子祖父乃作
斯歌献上登時以所募物銭二万文給之也

誹諧歌

是ハうたのさまのひとつかはりたるを誹諧といふなり
古今にはこのうたを雑体の部に入て
後撰拾遺にはこれなし（[illegible]）

[illegible]

云ふくらハ事乃よろしさを称知ミて殊ニ伝〻
云てまほよの御事ハ末代人兆可定之千載集
みえたりおほくハいつれもみなとハ推量にて事をも
その心を得すしてハ叶ハす後拾遺千載集に入たる云ハ
物狂の事ニ事にまてハ言の心にて事にて又やすらかにも
俳言をもちひてまさる也よりおもむきを伝へて古今
誹諧曰 誹諧有様 一誹諧 二誹諧 三誹謔 四
滑稽 五誹謳 六譏字 七嘲戯 八鄙諺 九狸言
此子細末ニ可弁之

折句

毎句上ニ物名を一文字つゝ置句也

からころもきつゝなれにしつましあれは
はるはるきぬるたひをしそ思ふ

をくら山みねたちならしなく鹿の
へにけむ秋をしる人そなき

是ハかきつはたをミなへしを五句の上ニおけり

折句沓冠

是ハ毎句上下ニ文字を入るゝ也

あふさかもはてハゆききのせきもゐず
たつねてとひこきなはかへさし
是ハあはせたき物すこしといふ事をかみしもにおきて
よめり 是ハ昔撰せしものゝ文字の程
みの天皇のおほんとき御身をたてゝ
為りふみ達以よりゆ身と
是ハこと了を冠にして花を身を沓に
してさうき海によませたり
てゐるの那みのをも宣にける

てるふに身をたてゝハあられをや
是ハ花をなり様くみてやと言事をきこえ
ときたく文字のをへすうハおもて折句也

沓冠

文めをつりはる文字をきゝてそをきせ文字を
一字二字におきてせく縁く
あふみのみうめふおくやそてけりもて
らんそうおりふちりぬ為りふ
是ハ花をたしめ程をもそふくみうのほけるも也

その字をもはなれとも字をやさしき事
これ大事なりよくよく心

物名

是はかくし題也物の名をかくしてよむ歌也
山井をへもみなかくしよりよみよりは
おかき栽のかるやとかくかんゆし
右六多流中は是は得詩お桜栽の枝と
くせりは山からは又りい以下は心字本や十六字
七字をすて屋もくを井にす是は九字なん

よくかれなりせ三四字をかくしてよくこそたのむ
多くかれともあまくの字は古くもの牛かくし
金蓮のかきのいうや七字をちらくをふくを
井にちね是みといふくかくしてよむ也そちり
又さひと菊犬はかくしてよみとはいふこそかくの名も
同物名也是みといふくてよむとよふ（井の又あらす
かれの文を月ならのとかくし作りなくか
なれかりともかんと作なりして古今拾遺なとに
かくされぬをあるなし也古今なとにはかくそりぬを

やうて花かく多ハそのへんをよろこひとも鳥
なんてもくしみとにゝ神也

贈答

花ハうきをかへしてをいふきこえめて大事なる也
人の尾をくありしてをうしけれ返しをいかんなり其
ことも心をやまさふくせると人ハ人の返事
をとうまるにてゐるハみといふる返事も返事も以
なるゝもにゝ又ゐんの事もはこすみるを云神に
にゝの詞をうしてゝ色を事まあるへ人ハ同事なと

詞をとくてもかへせる也云ハさけ返しをしてよろ
きゝまわりてハよろこひをなして絶ゆるまゝ也
真済法師の説法をきゝて安倍清行小町か
もとへ
つゝめとも袖にたまらぬ白玉ハ
人を見ぬめの涙なりけりと有に對して
おろかなる涙そ袖に玉ハなす
我ハせきあへすたきつせなれハ
業平の家に侍りける女のに敏行の遣しける

みなみは海ちかく渡川神乃ましましてあそふさまに
聞えしこのさとは業平の女にかよひく
あさしこそ神のまゐりあそひし河
内さへみなとききらは多くのさん
大貳三位さかまいて侍るときさへ行く
ほとりは人はゆくさきたゝ近く思ふ里ありとは
おもしろき所乃人をおもひ嬉しく暁露
なかしとや杜のそはにもこゝろをさして
きこゆるものはけふこそ

ありけるは比湖のうへにしもやのなかりけれ
石山は見らせしは、おもしろき遠くにしもおもひしれ
おかしき人たゝかるへうくさくらくはえてなし
石山寺中仏閣其く貴きかへさりてすゝろさは
きこえはきこゆるみをいふものせよ乃此筆を落と
ゆかしけり紫式部の人をことにしいみせる
らは源氏物語を人あそふまて此物語のなか
にはこゝかしこして閑筆をかりあそひたまはむと
此湖は人のあはれの〳〵をとりゆくにまかく旅行なり

後拾遺抄はおほくさきんの折ハ作者の名も
ともかくもいはれすといふに事はさらにもいはす
いはむ方なきことともおほく事にかなひたる
集にまかりいりてはいすくなしたゝへは見えけるそ
あるむねとありてとよみへ侍

後一条院御時行幸の上東門院にはへりし
身をもちてこゝろをつくす
えのミやハおりをもしらぬかなしさの
おほかミちるまゝに行かなくるかな

返し　　上東門院

今はよにひらりやかなる
おなし名にもとの[illegible]
またかさねてぬをとふ世をしらす詞にてそ心を
たてまつりし同詞にてハおほけなき二句をみる
かへりて二句又同様の事也さきのことくなる
のさ使はすこしかはりて詞をとりてある
おもひとも名をかへてとりたる様なれ
心しらせしたる人もちかくたりとふるまへ

あさかりとをあさくさの結をこへひとしまれなりけるか
そとよ名をくされはおほきはいふて葉平をきは
守家云はいふをは雪とそ押けるを
其名をすゝわりとを茎とみえまゝや
長文一の数也長歌の結かてゝめお様を長
らをいへてるりおても古様ゝは葉平はゝ
在事をとくさて也云とを母云人をなりを居え
ねをみつむりしは数多人は一番あすす様は
世可あへを乃はなのとかはて也志のおれけるわく

みりぬ連はすゝてはわりさ数よりおほて居るぞ
なを長歌を一の数に連てとくはえて在るて

短歌

一 反歌

長短歌ニ云也新古不限一首或五首七首ニ万葉一
首二首或三首又ハ多ノ首也短歌常ハ一首ノ短歌
哀傷也非他事詞ハ語ト多人ハ甚未也

一 挽歌

後ハ挽柩悲云ニ古挽云大略人何ト兆悲ト有人

一 相聞

長ヲ并ニ在春相聞夏秋冬雑ニ含同ト云ハ諸事
哀愁也以ヲ云テ知 後ハ挽柩悲云也ニ 但カヽ非ヲ
在ハ其ト多人ハ思ヒ云也短哥以哀ヲ并ニ但古今二十巻
相聞ノ挽并云類ニ上下在テヽ古内正述ハ依寄物陳思問
答譬喩挽歌思悲例ヽトあり様可勘

一 譬喩

たとへ云ことなり但ゑかくとも書する事也哥の衣喩思ひ云うり
喩思ひのそのうち哥物の云也

一 問答

問答也詩合も大戦問事上手也の問答ハ多く二首也
問事をと答るなり也一ハ問一ハ答也

一 相歓

哥物思ひ云ふ人云十七云天平十八年八月掾大伴
池主附大帳使赴向京師云同年十一月還到本任于時
設詩酒之宴弾絲飲楽是日也白雪忽降積地尺余
時也復漁夫之舟入海浮瀾爰当家持寄情一眺聊裁所心
残哥古哥毎云て思ひしを云ふ也

異躰

毎々ハ言の葉より新躰をなし也さきの作り花さか
字ちとも人々の心のまゝに無ハ海たいあゝへも流也高
字竒とて世の時の見様成山海へいつくへの作為
人をおもふ心から不躰の事是なり源なかお
範より事なり文字をゆるさで色多く万葉以来家
にも源時より以来をさりて立時にすき外
不中り是と不云躰ハあるくみしれ猶也あるに惑
しと不ハ申也文三年三日対意をとい不躰の事多く
をとして神代ニハ文字をさだめぬものとも云ふと
そうちきのをの外にハ雲るかんよう十七字も
きまりて作らぬさ海く躰を合せ連の新躰をなしたも

連哥

むかしハ五十韻百韻とつゞくる事ハなかりし只上句あれ
ば下句をたれもいひつけつらねては後みる人をも付ける也
いにしへの事なるゆへ其事ハ中比より其事也續物なと
中比よりの事とハ萬葉ハ尼のよめるを家持付之
さほ河の水をせき入てうへし田を
かるはついゐはひとりなるへし　家持
是連哥の根源也そのゝち或ハ先下句に上を付
又普通にも是を以なかくハ一句にてつゝくハ長句にて
のミありし也或人（連歌本説）ひとつゝきにて後ハ長々の句也よ

此いふを東貞朝臣日記に見えたりやと称そて云々
又天暦之比よりハ後ハ称名よみて流布
内侍式部金葉集に此比よりハ付人やよみたる也是末ハ上古
なんとも也兆朔ハ半ばに定まる次第に多人連歌の代
もの也此は半也吉ハ是を捨と云ハ半によみて生後に
不及口傳あり宗匠近年にして盤の事子細に付
其外にある故又禁制事及末代に至可沙汰事也
一發句ハ古勅に而可読人に其外に付人にまかせ
或又付挽筆下之連句入韻而連歌發句之事

神同て述人可為半字也

一発句ハかならずして可云切なりかなかなとも
とせぬ半也

一脇の句中ハて賤物也おもてすとハ人ハ物
名をかゝでハきかぬせこう七言鳥をところし
とゝひさめ七言莫をも可為也と云神也

一三句の内ハやすくとゝのへて定句又句の中也同
字ハ可用候されとも然れそハ不可為前句にあるを
然て一座連歌ニハ同字なきをハおかすもの也

一上句ニありハ前句のことハひとつて下句ニ山をそ
えハひとつく前さ後なる半ニえてきぬ半也あり
ハ前にハかきり後ニもかくして ハかきりとあらハ
とふあんをろ半もあり前一と也久しくハ月あり
かきりす書をなしてをもひとへれとをあく
又あるハふりてくるひきぬ句の五六ありあり
まハりんハ連歌ありてもしろく前也とくいふあ
ほくして

一売ハ下句せん折ありふ句の上句ニ山桜ありと表て

一名人は花のみにしたしたる事ハよろし大事也
又たゝ人ハ先同やうなる人をかたらふ事ハ殊に悪也
一かまへて連哥をハおろかなるにもしくたゝ
すきものゝよく久しく秋まてハよき哥ハ連哥なる
袖のうちより折々肝要事也
一心しもしらぬ連歌とりハよくよくたしなみて人よりも
すくれたる事なとをしらんとて連哥を人々に
たしなませ語てすゝめハ人をも人まかせ也ハまた禁
あしへハさはらぬ三つまてハよろしあしきをさとるへし

ちかきのちかしをみしまれたるをそれたる人をさる事
ハたゝ人の哥をハあまりは
一心くせさまに賤物しへならさる莫鳥の名か
ねたましかなる人まてハまなくちかうハよろしくき
こゝろ事也
一手さみ哥事ハよく〳〵かへて付て一字よしなと
物語りをもよみならひ一定なり心へ哥事也とくに一首
ハかきあらはしてこそ心にく連哥をもてあそふへし
さてハ人よりおもひの外のひとつけさりさきくに御哥を

到たとふ云事のありしに有心の中にも
さてはみとたかりしされはその人々よきにおほ
ゆるしてこそあれされは弁人又上手はみなみなよく
心へ侍てしと也
一二字ある物なと名ハあひしてハ法くあるとも多く
一字々とするにハ一句立てしめよするせ
一三字の上句に重ね候みとハ又そのよ下
句斗をとるをえたまはれは見るまとかりしある祉
去事ハ至すへからさるくさこるゆるせ

一傍の賦物をする事ハまろくきこゆる也多少人ハ
賦倉獣なとさき物の名々の賦物にいたりて郭公
みとさる事になく心へ侍事あり花ハ経
て梅のさる人にハあり様とも賦物にもあきたくハ
左右まとを取る也さる人ハ見ゆる心へくハとくもしされと
色さる人ハあまりの事にあるとも聴句の韻字に同
一多言菊の賦物ハ二方にまなひて心得ハ又するに事
好ハ作人ハ千字をもつて物の木あまり草木あり
一國ら源氏を賦にみへ心得ハみて右源氏國名心得

用字ある哥也又賤草に三乃〻葉としてこそ
の〻葉をさしてはかへて花ハし心みと云事多く
見ゆるしたきくみをしてよめ世間ハ式ハ候て
せんさくとはこの草にて乱たくされたりハゆるす
ここにあり云風情のを二くにたつを式可然
又かくたちてハみなそて名物をある物にす
事これ哉事也玉かけはなして桂ハみと云風
情也のうの事ねあそなれあみかへえ了お様
こそ連哥ハいはう風情をたてて哥まきれせよ

哥付遣ときこそ猶はなそこに人のよみ人をさせそれ
されてよむ也桜花の詞ハ付へつ〻一句連
哥の子もそうそくてもそきハ拾ての大事
也大僧朝臣の上の句にもるよ人をもつよ上京の流
のよ女房あらくいふみと云たれしるつのよ
はれそめてたりと云はりなるのよ女房乱し
そすとひとつに侍従大補かこハ思ひもいふ花の
又の神と付よう八殊勝なる事也世あるかてし東
三条のに屋条の又ありしてる沈良遅く紀家又の二
遅く

られて見ゆるみな月の姉といふ月の殿上人みなか
遊電にも忘実なくらむ字はむつまたい
しもの字也是は海ひらけみともの連所な
花例文字ねさ海しも也或略初の文字或略
上下文三下句如此字海も也

八病 喜撰式

一同心病 或号和歌頭病
衆揮の歌ちまへ月の明月
みと以下 後撰ある病但不可忌字也
花間字乃二句にある也句ごとにあるは不謂之
新やとはそらを見きもてあ生れり

作りたる人をまねとてしさ木
躬恒
さくらむ物といふは桜の姉
かりけりの字海を射るあ人

後撰花待は
山に鳴かれ乃こい
春二みりらん二おりちる所もりしは鳥なきて
後撰古今時代は病中花をさうて字の
残りはうちあへ射まおちて
海を撰集の多

同病といふ多く人は同心也
天さかる文字かりうたとも同心也とぞ

一乱思病 或号和歌遊病
おもひ見ずめみ射この鳴てりをふ有らく
はるさかりて見てねぬかそりみこらふ

いましへ詠歌中乃志ゝ似たるかことくに、
きらふし物をかきつくしたり
うたよみのよしあるなといひもりしをおほり近けれ
にしふ又ゆゑ拘也亦韻下不許人毎於放忘
三 爛蝶病 或号和平頭病 是本句よくて末句をも忘
寛平后宮哥合
あきはしそてゆくまの人かてた
ゆくかつてはいまは何の紙
内
夜茫日のくらをたすむく謙ハ
ごいもしそしらるふ事かう男

是又下不許人のよしさまにおほみえりんそかくの
ことし上下句をもまてるかかりも多是ハ不才也
四 渚鴻病 或号和上尾病 是病者起上以下述て詞不賞也
人をおもふはへ世のおきかきにまとをやく
さよひめのことはかたるも物ハ
かれせん冬枯ハ乃雪ニ付のうち
ことみそてをゆゑつ袖しさうまく
五 花橋病 或号和趣語病 是五字ぬなかて走ゝ用安着也
冬かれて梅よ雪ゝしそへりうれ

いはほの枝に花はさかりゆく

是又おなじ事なり声尽也

六 声祖病 或号和趣病

是は六句終一章上下三同也 声韻之二首中也 思派也云々

七 中飽病 或号結腰病 是廿五六字ある也

さゝなみはおほき言少く事を云なり

ちのくにの花はちるらむ 三十六字

おりたちてあかぬかぎりは人のあはれ

いはをもきかぬあはれそなりける 卅六字

是は十七八文字のおほきを云也 旋頭歌の一体也

八 後悔病 或号和解種病 或混本歌青韻不諧云々

是悪情後悔也 後悔と云は吉やうの

ようて後悔の詞を加ふる也といへり

九 歩病 喜撰式

一十 岸樹病 第一句ノ始与第二ノ始同也

なかりけりおもひのいはにおちて

かりそめの人にはしらで

おもひのかたにあはれなる

こよひそ稀に明そしなり
夜ねぬくるかとたのめしも也志て露をおきけり
いくあまの夜のおくをなほもとめて初句
二風燭病 每句中二字与中五文字同
うつりゆく花よりいかてこゝろみ
まつかひのそなたのうちにて
みなもてしをやしかおくらむ
あさきりのまよひてみなかに
三浪船病 五言下五字七言七字同也

躬恒
いまやとて稀に逢ふ夜の夜ふけて
花の散るのを見て見れとはかなし
よそにのみ見てやみぬへきかはらなる
いかにしてかくてあらし
是は浪の文字の字題なり 是
古今 喜撰式中ト云ヘト入病中
四落花病 每句同字重也 但本首不忌
うつろはぬ花にまつるなみたかな
みやまをいつかたきのひとつよ
花のなかにやとれるはなの人の

こゝにはさらに深く迷ふべからず

発よりみれば二也されど二句よりは

毎句同事のことくとぞ云。

七病　浜成式

一頭尾病　発句終字与二句終同

頃

春(?)梅のかをて乃河ふえあらそひて

見るくてゆふあやまふ身のなれ

濃袋(?)田代(?)らかの着のごま紙(?)を

こゝろてゑなる露すぬ世(?)ゆ

春(?)すゑ乃みと井出の川すきれ見えけり

花ちらすまでのみのて也

二胸尾病　発句終字与二句三六字同也

張寛(?)

名(?)におはてはなきてをきれしの

てらなはえをすきらんいそきなり

すかにおもて乃なはるゝのなき也

三腰尾病　他句終与本韻同也第三句終字与本韻也

南(?)

岩(?)代のまころこゝろのいはまてふ

うらいはらみなや去りゆきまん花

経(?)家云古今集(?)離之規(?)範(?)也

二句(?)のすゝは病身春の若風(?)よ

きこゆれはなかなかこゝろそみたれつゝ

四黶子病 五句中非韻与同字也 或謂之巨病

花のをふをかへてそゆくそ雲みてく

いはくらのやまさくら海

ひめの花にみゆきてうつるて

雪柳やまよりはやくてみえめ

是下五文字与同字也心の字のおもひを云てそ

五遊風病 一句中ノ字と終字と同之

雲ふゝ花咲わかんとおもふらんそて

野へいてゝはつかにみえし月よりは

人をしてよそにせてむかしのはなれ

みこりよりのを見やまなし哉

六同声韻病 二韻同字也

みよし山のされたるさくら花

ちりのこる風にさそはれゆくか

しらくもの大山あらしにさそはれて

ならへていつれか花とみわかまし

桜花のちるとちるなるそと上句末字本

韻也下句末同字也

七、適当病 三韻中於韻二字以上同字有也 新撰髄脳ニ禁之

ごこのかはきしのおつる庭さくら回なり

又見るにしきを志らしこそおもふ

春の雲とみゆるはしらねの

よしの山みな花さくらかも

是同字有事也同字有上ニ号蜂腰有也

号鶴膝近代不禁上古多

又新撰髄脳禁曰 ふるさとの山のかひよりそう

乃字のひとつの事禁之山里はもの〻わひしき

たゝひねすてそおもふ又みつの浦恋されぬ

心ひ花をすてゝこそ恋しふしく

紀のうの文字乃そてのおひさる事也云々

浦なく風よこうち侘くやうなけくとふすとも

あり己上三ハ新撰髄脳禁也

己上載禁也此外禁事

一ほとゝきすは名のみなりけりこよひの月を見る人ありや

桃の花よりまさるかけもなき春の夜の月ぞすゝしき

秋色のなにはの江の心なるなり也　是一格字平他　秋字同也　字平頭病ニて

一かきつはたあかるみかたるしみえ新花をなかめ人の家さ　俣者ニ今人九字病須不離ニく

每句上同字あるなり也二字ハ常事一字を禁也

やちよ毎へやかくはつる屋へ梅やそうら人をもちて

てそ見へあるにしめるは高陽漢前合のうちの宿

花ハつきくるなり也三傳（侍に）みかきとやせ文城邦て

みさし不許也

一終七字ヵ有ハ字畫許深誠禁ニ古今此渋ノ

眼前漢命令左勝躬恒ちつ梅乃絵そて

字ちに而不可猜斗ニ上ニ病百首以下集ニも

皆ハ見えて不ニて勝計ニ近代ハ無禁也上古ノ詩ハ欲

同字多也字一同へハニ病斗不禁也此ハ家隆ニ

山そえりかくまへ着のといつる春ニ雜連ヵの

字神ら霧やとひくる也物といつる物ニ也

春の字近吹もちもくなのありいきハ不

為病句後撰拾遺病例も不有ハ多し又今古

万葉已下ニ字ハ同字を二句乃比頌句ある宿

あきハとひ子山まハ数ハ乃へといつるを此病の

ちよは陳なり事古人不為可披を不審はべれどは
准病さうなく引かうすみ猿上古も大名人

評合子細 節事

一二番左は前能人の帰かへ但此題にて 俊頼 孝善 我人 家之
例也一番左方は不可負も為負すも為持ト
右清事法藏殿前合 相撲負侍従
乳母又法性寺関白家前合左俊頼負大弐宮
但云作者の賞可為証左小野大宮前合有
例人此善通事抒重泥事出来不及左右事
上

一祝前は清也神社の名など題以来前合二番
左春日参右七夕是は持也此基三年前合
一番は右もでは山とよみかて持大二条関白にてか負
へ判とて無左右勝と定前関白有其仰乱
判者よみもて前人のよみさと以斜可構祝
無負事其先長家にて良乃慶涙
非遂乃上一番左事生一くして未深つしよれり
なくすみは負二年文応和二年の前合なり
祝前負二手是は前のむけなく上は不為偏
上

一諍合にハ是を廻名所にてをハ難為難也近代
多く上古をも例證とハあまり之事也但同名所ハ
五句ハ可用是月の詞にハ是をたれをも嫌ひ
きえすてし山てらのミ暮後をきて云ふ月とよめる
やうに寄合なれとも云難なる事にあらて
此詹にさしの中山多く名所を並ぶると云
有其謂或の詞合にも樅山同しく又源太寺
本宮花によりての松山てよつる所季難しツ
根合にもあさるれねさハ嫌不可遂にて日に字ハ

一是難也されハ四季に亘事子とにハみな嫌之習也
一春の月乃そのゝひかりとハ霞のをも花乃をも嫌難
給ふとも不せんに用詞也
一同しにハこれをきらへてとて謂傍如大輔のさ宿宜く
旅のやふてすく鴈ハそのゝ天風やさしみる
らん春に見ゆるをとふるをハ或不為病と見え
病也よひと夜とハ或書にとくとて不為病
にハ初秋とかゝる同ハ同詞也是病也其元寺
合既同事に但後近病不指南事子說寄合

光則のみちを世にしてむかしとやらんなれともこれより疑
一周章とよちこ玹燥之可揮し、光言申盛肩し
春善庭翁ら隔靖疑徂縫待氾非病こと
政直さ之のあゆ下羽しけ各きハかえいふと
いふるをハ後代の紀信遂病こ被てと離半と
一岸樹病根ちん背し左大相合 紀年代 宝永元
被の斎子七よる新疑三道日今頁し此
涂十各殃
一おのつさ愛もあらぬ半従へハよそのれとすこし

ものちこのれし手ミとすミの羽そこて之
光ハ元合あら羽と紀信拾遺同答こ疑こ
ちのきれてとおのとハ文字てとすの也玹為疑玹
疑元合こ不疑半有文疑半とあの撰集こハ
皆ハ合光かのと連ハ空元のあしもちの地と何を
のこさの羽こをとの光ハかのとかとかをの
高陽境元合こ通縁の月とけとしのちきこ
婚の夜をみの此玹日ハ不忍の事玹光
しのとは也

一さゝなミや志賀の都 比良の山ハ近江國志賀郡なり志賀の大
わたりハ小野宮殿なりし所にてありし
なれど今ハ跡也又長等山合
乃東の方の里を比叡の辺ハ志賀と云ふ
といふ天智天皇の大津宮の都の年
志賀郡ニ都を遷して後ハ大津の辺をしかと云
事ハ所々為跡也
一所々の都ハ天徳元年の元永春浪よ萬葉に
海と云ふ玉乃をかしき玉也うゑも読る事多く

今御幸ハいにしへの御にて今の桜花にて力
落の名やとまりにこころをとらし
云ふことをおもひやることなりそ此跡にも
比叡の世にありてが跡といへる根
今の御所云事歟通音なり道房此跡へ
迄とかの桜の事也此仲実歌にも
跡ありける事也萬葉集にて此
いゝきん 長元年後二年中跡也
一同事乃綱かよるハ志賀の辺寛延年与乱

東宮御息所 子今務 介礼ら介当微子女御の子今中務将
良岑ら宗利寛和子今惟成か朝或不心病ゝま是
をいゝ病也遁とく多女山ら峯子は子今勅判
山峯とまとかりくりとうゝ彼形基は謂は病深
不あ病山とゝ多根同年也或不心病ゝま是をそ
やまは也遁とく多くの帝陽院子今通修すまへて
山は志て書法ひれとも志かさかての体をも也かり
又同子今那継と山をいふといひてよらの多ゝ
やえり是非諸注禁持也日ら青郎の子今務以

よりてた人は清少年閑白子今将昌ら書られなき
いひたりやうにいはくたゝえをとゝ人のふるものへし
いふ彼形白ひたりて人は歌きとけ其後不題
仲実為題今集可題此年是は病はあるをいへり
といふは人のあるさへ也古今集にいへりたとへは
物の名の歌は人をまとへ草子よりひとへ
といふは病也又和僧法師の宿てよみかはし人
あまくあまとて月よりいふはすこしも是も
有題負半但物のなにかれあるなる人年月を

日月と言ハ信心のみの月をいく度の明なる歌也人
あきらか月をいへハよしといふ光と同事なれハ
かりそめ也可有病と云ふ事を病也ニ条院
大嘗会輔親孫よし念を祈と申文家六合
祈植なる精代与年光をハ皆病也誦六合精算
さてくさし君きかやさあれハ池のあさくあこる
らさ精光ハ後てよ不病君の代ハみそしてまき
まちかせみといひるハ可以為病也と云事にし精なる
かり文こゝあさきに花はよきこにけなこの

二の歌ハやまし也後らて天徳精年輔親家也せなそ
いろのおしみれとしてハめのありおらむ以病
かり精日影家路外に不精読光持例よく
一きさせよきへ歌の同事病にて病よおありてあるへし
鐡子六合精ハ定さるらしハそよそもれしる山明哉
ちかいし人をおしきおりくえ文寛和精長保一宮ゐやあらむ
あかねさしやしくやうへかさまおの山桜さの花文
袖なるに夜あさ数きをてあそ後とおめいハやさえ有
もみとハつらみ月

一凩与木枯古枯木からしのとかく如何なる子細を
いまた二寸之あたえもなく凩をハ例多れ病
あり去嫌

一同字異詞一首一不ハ嫌二二三不ハ嫌之
連歌曰あをハさくらそあるあ去一首ヲ嫌之

一かさ詞ハ病ニあらされとも嫌之其後申出き衣
のゐりくハせてとハ南をハ同字とて嫌可
銘大納言八大臣行神の忠行くとりて又多
後をとめり基後嫌之是ヒハ同字なり也

一詠古哥ことさらに古今哥ともいひそゝハ此方も
近代諸すらす事多し大臣の二句古哥なるハ
此条上手ニ句とてはうなとのまよう
而了

一弱花詠落花桜紅葉詠落葉事寛和元年
并言陽院歌合有之皆不嫌之月又日之有
例物集大意字更此嫌蓮暦并郁芳根合
及此法同判者有科故人熟之以此事ある
天徳朝忠の人ともさともすれ也近代意

字有ハ其庭和哥ニ合待郭公ニ依理さゝれ
趣りいてまたおり人ともあれておやめの様也乃
ことんに哥ニ詠ことをいへるを持とす卑ハ連歌の
詞を可准く関して古今巳下まといひ意ある不
可得升更ニ非難

一 親ニ詠常花ニ事家アル家ノ歌ニ合ニ其後の様
たたりの出来の云拾常花ハ不親ニ以詠出歌也
称花山環歌ニ合ニ深正言ニかん代ニいへるの
天ていまたる人ニ対作ニ忘れなくてあら人とこそ恋ハ

猶さ事也

一 郭公題未言ニ其難ニ多ノ瑞瑁ノ歌ニ合郭公ノ歌
未言ノ衣ニ哥ハ言とて便信判者大納言根合雅経文應但

一 詠述懐不難寛和歌合山郭公ノ歌近代多

一 詠意不普通寛和雅恭言歌ニ詠意ニ組題ニ
非恋歌ニおりむらし紛ふ人ニ是恋ノ哥ニ抜山ハ
云ノ風にあり恋ノ子とハ詠題歌ニ非恋人ニ霧
猿ニ也振人ハ意ニ可さ事也

一 優情題天徳ハ寛和已後ノ歌合ニ依事ニ常ニ記

かやうハ云鶯時鳥之物ハあれ共侵之
一 詠哥可寛平后宮哥合鼻風棟梁有之
但不可用之
一 歌道不過意ハ易常ハ歌道猶不可学之由云
宗半兄之〃是非執也但源氏物語自其詞可学
詩會哥 如歌風情哥同之
然可云禁忌非哥合ハ少し難ハころゆるすへく
可然雅宗御運ハ非可被禁忌但如此事ハ
為悟異也中ニ上手中ニも失有也君ハ大事也

ある雲のかかりけるを見えけるハ多くの花にまがふ
ましかくハ人をよらずて雖難詞は此古事也後拾遺
日堀河院御時花山院御哥有賞子侍従孝
之出花月将隠又有事堀河院中宮哥合
寛仲実のたまのみとのとよめる落失如此事
今古多人同様日根合同陽明の料下の人の
多かりけれハ人とよろしき事ニされと意の哥
なれハ然不詠候へハよき歌の事也ハ又ハかやうな
ことも云ハ古今にかはりて詠歌也御哥合詠和歌

法師の恋の代にて息乃松山の法も深くとくゆる浅くさ
いかなる事なりとも云はれて合葉とは様なり
此事ならでは可也也おもしろきは於様に事
より高判なれは又恋の也かまへて前にまかり
又さして事也

山　可嫌名所并詞

箱根
きさかたの山　是ハ名所なれハの上箱根二子の様なれハ也　吉野龍田と名所の様なる事にはよるまじき事をいはるまでこそいこくいひて可嫌き
名所をはいはく前也

大社
神なびの山
住吉
いなりの山　きのかの山
法やまもとらやまにて法ハ　此山にて山にもれをとする也　生死云名をもんなる也

鳥籠の山　和歌也　葛城山
おそのさき　おてぬ山　うら島のまさご　百韻　まさごうとは浮
庵あはの里　さるの池
玉川　あゆせには　さほゆみに　発句に嫌
南の国　神路の山　あてよ　月と出ことを見てそれハ嫌の沙汰にて　是ハ夜に新世とかの閑夜なれは也て嫌
うきよせ　さかりは　河を
いはせの山むすび松　是花のこほりる嫌其名にて八名所流　いはの松八名も恋ハそうりある也
松浦なる海　名花の海也　かすみの海のかた　ふなくな　しほの関も亦
なくなのこすゑ前石　細流の寄の関のゆるしへつる

なかこそふる夜 ゆかこそ枕 むかふは才麻

味耜高彦根神 みよをまさをかひて神のみこと

この神ハおほなむちのみことの御子也あめてらひに

しふてのちかきなとへりて乃わりをくひれは

山神にまへ乃わりくあめてらひにとこゆひ給

みなりまあめてらひこ乃国かちにさ山神なに給ひ

なり給ひて空よりくあめてらひこれかなから

この神なとりかりてまうことはきとくしたりそ

みのけ生ハ光ありし人は神をいふそ見ぬとなり

そのいひくたちをかねきかくとやときき給

なりきやといふ心ある人あまの庭あり

こ詞らしるつてい海乃里 恋すてよすうてなりうや 有連ちきれハ不様

みなれてのくえならりくみまこめてむす娘 早苗 かすらの

おくたゆる 二首ハ 加筆也 いきみなをくみ海きいうえむかる

言ふくれ月日をゆひ まみ一宗 覚慎詞也 但有例

伊平曰停世は寛平時代うまゆしとそうきのむとして御 かもれ歌の奇也
いて云御歌也但可此時よいのまてひてハうましうまかんりきよとハ
此人ヘ了方の扇并会らいの娘河やきの人佩信様事之此歌各上之證
拾也擁河侯中宗之記契邀并ツ上御藝かきせまて折くみ又きき擬之郷
明是むりのふくらうの此様也折くハおうきせ也海峡中にわりと云津様ゆ
須猶明作り例撰進るに折てみらうひのもわり作擬記源座信明信并定

麻結ニ句一字也も可思之作下折別字あれとも折字の用
字也されと折を可忘之
哥乃詞ハよくよくハえてしるへしまり述懐と
あり難見えたる句や恋句文字によりまた不
揮字也あまりさまなくてハいかなる字なりとも也
称之候ハ物の名のたくさまにかたくすへく候すと深
ここに文字を以てハ出家乃相文叶ふまりてしるへし
ことになき句は法きを句なるを守へくみて候ハ禱り
き也哥乃字か用されと随之出やうきを立つとぞ
准之可斗云宴にハ賦物とハよ寸組天地

賦合ハ初心の賦名との物の名見えなくてはよめる自
賦されん賦をハ名理あれと字ハ清書物唐様敷
改長ての宿かな花の本清ふとよめる枝ハ賦人
ある称と被賦入字文字を二之書くしる事ハ
なくて物名ハ字のそくみるを禱り
賦合あるよハあるからの題をみなにて字ハ
ある水岸風字ハ題字か役されともさき程は
また改く禱也いくいさ入しもされと賦給へく
まあさ也されとて候やく題を申さずれて禱り

又ちりかくれてくの事そて京ハ大事ノ繪
信ハ廣沢池と月とよみよいて後乃なとらさて用心
後撰ハ名残野草ニおさめ哥よと讀て用ル
松みと以ハ浦上ハ人みみとえみと讀り此事
而所猿丸野集ハ先ミ此志乃屋と以ツ上ハ
みりし家を好人乃秋みとよみりハその京ニ
詞ハ此也おみちりよ説をよとい五人とハきの説
をきて并ハ此物の序説ハ一定ありね
通さ事也とく以て哥一出ニ書不可物と

是ミて一と物をよしとハ哉雖ゑよく人ハ得ちの事
を基俊雖とろていせさは常事ト

△学書

万葉集ミ下ハ代ミ勅撰ニ細在絶本

家ミ撰集

新撰万葉 以詩讀歌ニ号ス菅家百萬葉集
菅家撰也二巻言書也序日寛平五載秋九月
廿五日下巻延喜十三年八月廿一日ミ記也
人撰也此説源相公説ミ如何

樹下集廿巻　多々法眼源賢撰　撰有〻假名序

言〻集一巻　砂国撰 有序

山伏集　不知撰者

良暹打聞

隆源口伝三巻集

続衛士廿巻抄

良玉集十巻　顕仲兵衛佐撰 大治元年　明〻今葉集

拾遺古今廿巻　教長撰 有序　永暦明詞花集

続詞花集廿巻　有序　長元?

河内勅撰二条院崩御　不遂之く

顕昭法師　三巻　号今撰集

玄玉集　不詳　清輔公ゟ撰者不詳　又古今

[illegible]　又撰者　古今抄　[illegible]　首〻入[illegible]

宝花草子　[illegible]　賞仲　後拾遺　四巻　不真

五葉集六巻　後白河撰 有〻序 教長作く　後冷泉之条 白河 堀河 鳥羽 五代之〻

又号山階集　撰者範兼

拾月詠集抄　撰者[illegible]　至保[illegible]

歌物語年又多〻詞不施用上

抄物上
万葉集抄　五巻抄　貫之撰之　廿巻抄　不知撰者

類聚歌林　山上憶良撰　平城天皇之〻

新撰四巻　貫之古今後撰　但不違之

金玉集一巻　公任撰　通憲注之

拾遺抄十巻　拾遺内又百八十五首　花山院之歌

玄々　[illegible]　明親王

深窓秘抄一巻　公任之

万葉抄　[illegible]　五十巻

和漢朗詠抄二巻 公任　新撰朗詠抄二巻 基俊
前十五番 公任　後十五番 不知或定家
三十六人撰 公任　続新撰 通俊撰 後拾遺同 三百六十首
明月抄 定家　類林五十巻 仲実 有序
悦目抄 基俊　相撲（撲イ）立 同
花林百廿巻 俊頼 補子合廿巻 會廿巻 百首廿巻 外三十巻　諸家記類 撰者不知 知足院不有也
五代歌枕
公式物遠近不可得討尋善通不用之
以外

能因花抄一巻　麗花抄　蓮府抄二巻
葉門集 家経　山戸庵田集　古今注抄
句集十巻　袁集世非俗物
大江廣経上科抄二巻　類聚萬葉十八集廿巻 百葉
両家式
歌経標式 参議藤原浜成奉勅　和歌作式 喜撰奉勅
孫姫式 有序　石見女式 光孝天皇御時物也
五家髄脳
新撰髄脳 公任　能因歌枕

繞枕(?)草紙抄　　　　　　　倚梧抄　仲貞(?)

奥義抄　異本　拾補

六條(?)貞女口傳　隆源口傳　古下(?)濟(?)

近衛道嗣家抄　江帥袖中(?)一字

袋草紙(?)吉(?)風抄　完(?)明(?)從(?)世　又大茶(?)

道濟十躰　為(?)代世抄物不可(?)傳(?)許(?)

物語

伊勢　上下　大和　上下　源氏　五十四帖

六條物語北(?)濟(?)家(?)要(?)

家々集

雜々

家々合會　自其家中　註家

雜々家々集

IIDX
630
5
1